

イベリア半島における俗ラテン語の音声分化 (上)

原 誠

まずはじめにお断りしておかねばならないことがある。それは本稿のタイトルと同じタイトルの著書がDámaso Alonso (以下DAと略す)にあることである。それはマドリーのC.S.I.C.から出版されているEnciclopedia Lingüística Hispánicaの第I巻にたいする補巻を構成している。つまり卒直に白状するならば、DAのこの本を大学院の学生諸君といっしょに読了したので、いちおう同書の書評みたいなものをしておこうということなのである。

ところで上記E L Hであるが、まだ全巻完成しているわけではない。予告を見ると、

序

I イベリア半島諸語の来歴

- a) ローマ以前の諸言語
- b) ラテン語
- c) モサラベ語

II 人名・地名学

- a) 人名学
- b) 地名学

III スペイン語学

IV カタラン語学

V ポルトガル語学

となっており、全部で6巻から成ると書いてあるが、各巻の構成がどうなるかは不明である。げんに既刊の第I巻は上の序およびIとIIから成っている。従って未刊の残り5巻の構成など知る由もないというわけである。さらにこれら全6巻にいくつかの補巻がつくと書いてあるが、そのうち出版されたのは本稿でこれから取上げるDAのFragmentación Fonética Peninsularだけである。今は一刻も早く全巻が完成することを願うのみである。

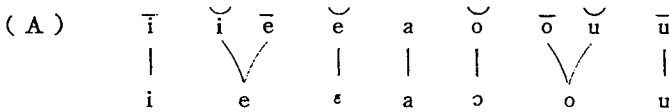
ところで著者のDAであるが、この人の紹介を今更くどくどとやる必要はないと思う。現役のマドリ一大学哲文学部ロマンス語学科教授で、「ロマンス語学」を担当している。筆者は彼のこの講義に1年間出席したが、色々教えられるところが多かった。ロマンス語学にかんする限りスペインを代表する学者であるといってよいと思う。ところが彼をロマンス語学者として紹介しただけでは彼の全貌の僅か $\frac{1}{3}$ しか描いたことにならない。彼はまた現代スペインを代表する有数の詩人の1人であり、かつスペイン文学者としても名高い。これはいつも筆者が繰返し述べていることであるが、スペインでは語学者と文学者との両面を兼ね備えている学者が多い。Menéndez Pidalに至ってはさらに歴史学者でもある。Lapesaをlingüistaと呼んだのは片手落ちである。このような事情を理解していないとスペイン語の“filología”という語が分らないのではないかと思う。つまりそれは非常に文学的な語学であり、また非常に語源学的な語学なのである。従って純共時的な文法学などはとうていこの中には入り得ないのである。なおDAはスペイン文学者としては最近とくに

Góngoraにたいする関心が強いように見受けられる。

いよいよ本の内容の紹介・批判に移る。この書物は全11章から成っていて、全部読了すれば一応スペイン語史上問題となっている音変化についての概略の知識が得られるとあってよい。ただし F→h→ϕ については重要な現象であるにも拘らずほとんど触れられていない。思うに Jungemann の名著その他によりいちおう解決済みということなのであろう。またこれに劣らず重要な母音間無声破裂子音の有声化についても同様である。

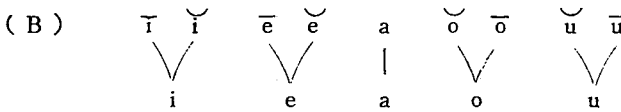
I. 第1章は「(ある解釈を動機として)ポルトガル語とスペイン語との母音体系について」と題されている。この「ある解釈」とはドイツの若い学者 H. Lüdke がその *Die strukturelle Entwicklung des romanischen Vokalismus*, Bonn, 1956 の中で主張している説のことである。

一般に古典ラテン語の母音体系は長短の別が音韻論的対立をなすところにその特色がある。ところがこれがロマニア各地に分散していく過程で母音の開閉に音韻論的対立を認める俗ラテン語に取って代られる。しかもこれは当然といえば当然なことであろうが、それが分散していった各地においてそれぞれ相ことなった変化の仕方を示す。その中で最も支配的なのは「ロマニア共通型」と呼ばれ、次のような変化を示すものである：

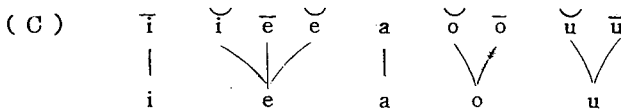


これはイベリア半島、フランス、レド・ロマン、ナポリまでの北部イタリアなどに拡がっている型である。

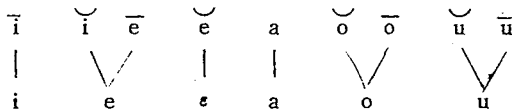
これと対照的におもしろいのはサルジニアや南イタリアの一部に見られる次の型である：



また左右対称をなしていない型もある。たとえば南イタリアのルカニアの方言に見られる



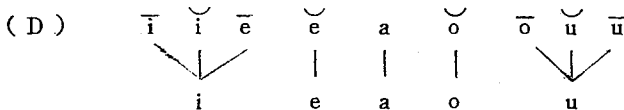
だとか、ルーマニア語に見られる

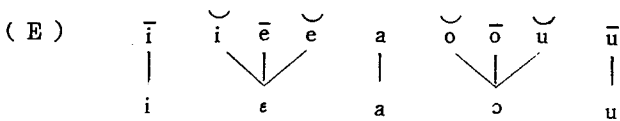


とかがその例である。

最後にやはり南イタリアの一部に見られ、「周辺型」と呼ばれるものがある。(注1)

(注1) D型を紹介しなかったが、元来こういった分類をしたのは Rohlfs であり、目下の DA にはこの型は関心の外にあるらしい。参考までに、これはシシリア島やイタリアの極南部に見られ、次のようになる。





さてこれらいくつかの型を古さの順に並べるとどうということになるであろうか。常識的には(注2) B, ルーマニア型, Aの順に古いということになっていて、もちろん定説になっている。ところがLüdkeによると, CはBにルーマニア型がかぶさって成ったものであり, EはBにAがかぶさって成ったものだという。この仮設のもとに彼は眼をイベリア半島に向けるのである。そして非常に斬新な三つの主張をする:すなわち

- 1) バスク語はBの影響を受けている。
- 2) ポルトガル語はある種の名詞・形容詞においてルーマニア型を有する。
- 3) 動詞においてはポルトガル語もスペイン語もEを保っている。

というのがそれである。こういった色々な型がイベリア半島に併存しているということは、まずはじめにBが移植せられ、それ以後ローマ化の過程において色々なラテン語の型が移植されたということによってしか説明されえない。すなわち原初のBはバスク語に、ルーマニア型はロマニアの最西端であるポルトガルに(また最東端のルーマニアにも)それぞれ残り、また動詞にかんしてはス・ポ両語においてBにAがかぶさってできたEが残っているとLüdkeは主張する。

この主張はイベリア半島にもたらされたラテン語はB型であることを示唆しており、それがA型であったという定説を支持するわれわれにはいささか奇異な感じがするのは止むをえない。当然DAの反論を喰うことになる。彼は次のように論駁する。

(注2) これについては, Haudricourt & Juilland, *Essai pour une Histoire Structurale du Phonétisme Français*, Paris, 1949, pp.17-31 に説得力のある説明がある。すなわち(1)母音の長短に音韻論的対立を認める古典ラテン語は(3)母音の開閉に音韻論的対立を認める俗ラテン語へと一瞬のうちに変移したわけではない。どうしてもその中間に(2)過渡期を認めるべきであり、この不安定な時期にサルジニア, コルシカではīとī, ūとū(以下同様)…がそれぞれ単一のi, u, …になっていったのである。ちなみにラテン語二重母音の変化ae > ε, au > o又はoのうち、前者が後者よりも早く行われた理由はひとえに解剖学的構造に見られる発音器官の不均斉性によるものである。つまり口の前方は後方よりも拡がり豊かなので、前方の方が新しい音を新たに受け容れる余裕が後方よりもあるからである。

次にルーマニア型の成因であるが、これについては口の後方で音色の同じものどうしが早期に混同されてB型を形成し、前方では混同が起りにくく、定石どおりA型となったと説明される。結局この型は不均斉である。この不均斉を取除くべく後になってε > ieと二重母音化したのである。

だいたい以上のような説明がなされているが、あまりに説得力のある説明なので却って薄気味悪さを感じさせるほどである。なお著者である両氏によると、スペイン語はフランシヤン, 北イタリア語, プロヴァンス語とともに(3)の時期のうちの初期に属するのだそうで、真の意味で(3)に属するのはauをoに変化せしめたフランコ・プロヴァンス語だけだそうである。

1) たしかにラテン語からバスク語に入った語の中にはA型の変化を受けていないもの ($\tilde{i} > i$, $\tilde{u} > u$)があるが、B型を守っているルーマニアの一部地域の現在の語形と、はるか昔に非印欧語系の言語にはめ込まれたラテン語の形という年代の上で著しくかけ離れた両者を同一次元において論ずるのは誤りである。それは後者がいつバスク語に持込まれたかが不明だからである。ただ一つ明らかなのは、 $\tilde{i} > i$, $\tilde{u} > u$ をいまだに保っているバスク語の語形がラテン語からバスク語に入ったときには $\tilde{i} > e$, $\tilde{u} > o$ の変化が未だに起きていなかったということだけである。

2) Lüdkeはルーマニア型(つまり $\tilde{i} > e$ となりながら $\tilde{u} > o$ とはならない型)が極西のポルトガル、スペインに残ったというが、DAは $\tilde{u} > u$ のまま残ったとしてLüdkeが列挙している例をすべて、しかも逐一、それらは語源がもともと \tilde{u} でなく \bar{u} であるとか、特殊な音声変化の条件により説明されるものであるとか、教養語であるとかいって否定している。

3) ス・ポ両語の動詞におけるE型の残存について。

LüdkeはWilliamsがその著書"From Latin to Portuguese", Philadelphia, 1938の§ 176, 3で述べている"語根に $\bar{e}(\tilde{i})$, $\bar{o}(\tilde{u})$ をもつラテン語の動詞は \bar{e} , \bar{o} をもつ動詞の影響力の前に屈した"という発言に反対しているが、その根拠は動詞を除いてス・ポ両語にはルーマニア型の母音体系が支配していたという彼独自の説にある。ところがこの説が今や上記の通り否定されてしまったのである。

DAは動詞にかんしてはE(←B+A)型がスペイン、ポルトガルに残っているというLüdkeの説を論破するのに、はじめにB型がイベリア半島を支配していたことへの反証としてガリシア方言を持ってくる。その意味はガリシア方言がポルトガル語よりもずっと古い形をそのまま保存しているということにある。さらにまたポルトガル語やガリシアで話されているガリシア方言よりもガリシア以外の地域で話されているガリシア方言の方が、ずっと新しい発展形を有していると同時にずっと古い、不変化のままの形をもとどめていることにも注目すべきである。ガリシアのガリシア方言、ガリシア以外の地域のガリシア方言、ポルトガル語の三者を比較した場合、 $-ér$ 活用、 $-ír$ 活用の動詞の語根強勢母音にかんしては三者とも一致した変化形を示すが、 $-ár$ 活用における語根母音 e , o については前二者のそれは俗ラテン語と基本的に同じであり、ところがポルトガル語では俗ラテン語の開・閉両母音ともに開母音となってしまった。どうやら前二者の母音体系の方が原初ガリシア・ポルトガル語のありのままの姿をとどめているらしい。つまり原初にはA型があったと解される。

以上がDAの反論である。LüdkeとDAといずれに軍配をあげるかと問われれば筆者としてはやはり後者にあげる。次章に出て来るSchürrについてもいえることであるが、ドイツのロマンス語学が著しい発達をとげていることは卒直に認めねばならないにしても、一般に非常に観念的なドイツ人の学者の頭には往々にして常識では考えられないほど突飛な発想が思い浮かぶのである。もちろん常識というものがかえって学問の進歩を妨げることや、一見突飛と思える考えが後になってみると最も正しいといったケースがあることをわれわれは謙虚に認めねばならないが、一般にドイツ人学者はそれがどんなに突飛な考えであろうといったん正しいと信じ込んだとなると、頑固なまでに大まじめでその説を主張する。より正しいと思われる説が現われても絶対に屈することをしない。かくして衰れにも茶目なスペイン人学者のやゆの餌食になってしまうのである。上述のLüdkeの場合にもややこういう感じがしないでもない。

II. 第2章は「スペイン語の二重母音化とロマニアの二重母音化」と題されている。いまラテン語の強勢のかかったeとēがロマンス各語において二重母音化したかどうかを開音節と閉音節とに分けて表示してみると次のようになる。

第 1 表

〔 ロマンズ諸語 〕		ē	ē	〔 備 考 〕
ス ペ イ ン 語	開音節	○	○	ē, ēのみ二重母音化
	閉音節	○	○	
ル ー マ ニ ア 語	開音節	○	×	ēのみ二重母音化
	閉音節	○	×	
フ リ ウ リ 方 言	開音節	○	○	
	閉音節	○	○	
ダ ル マ チ ア 語	開音節	○	○	その他全母音が二重母音化
	閉音節	○	○	
フ ラ ン ス 語	開音節	○	○	ī, ūを除きすべて二重母音化
	閉音節	×	×	
イ タ リ ア 語	開音節	○	○	ē, ēのみ二重母音化
	閉音節	×	×	
レ ト ・ ロ マ ン 語 (フリウリ方言を除く)	開音節	○	○	グリゾン方言は全母音を二重母音化
	閉音節	×	×	
サ ル ジ ニ ア 語 古プロヴァンス語 ポルトガル語	開音節	×	×	全く二重母音化せず
	閉音節	×	×	

この表からスペイン語にかんしていわせてもらおうとすれば、それは俗ラテンの母音を全然二重母音化せぬサルジニア、古プロヴァンス、ポルトガルといった諸言語と俗ラテン語の母音をすべて二重母音化するダルマチア語、グリゾン方言との間に狭まった中間的存在であるということであろう。

ところでこれらロマニアにおける二重母音化はなぜ起こったのだろうか？ これには二つの有力な説がある。

〔 A 〕 Wartburgの説 (注3)

フランス語、フランコ・プロヴァンス語、それにイタリア北部の諸方言を含めたイタリア語におけるラテン語母音の二重母音化現象を、フランク族、ブルグンド族、ロンゴバルド族による征服および植民の歴史とおのおの場合について比較してみると、上記3地方のおのおのにおける彼等の征服とそれに引続く2言語混用の時期とが二重母音化の決定的要因であったろうことが明らかとなる。上記3民族の言語には開音節の母音を引伸ばし、閉音節の母音を短縮するという調音上の習慣があり、ロマンス語をしゃべり始めた征服者のこの習慣のために俗ラテン語に存在していた類似の傾向が強まったのであろう。すなわち開音節にお

(注3) 彼のProblemas y Métodos de la Lingüística, Madrid, 1951, 同じくLa Fragmentación Lingüística en la Romania, Madrid, 1952より要約。

るこの引伸ばしによって、緊張のゆるんだ長母音が二種の音色を帯びようになり、二重母音化したのであろう。こういったことはもちろん短母音、閉音節の母音には起こらなかった。

以上が Wartburg の異民族の上層を認める立場である。しかしこれではスペイン語およびルーマニア語の二重母音化は説明できない。また付随的に「開音節のみに起こる二重母音化は開・閉両音節に起こる二重母音化と起因がちがうのだろうか?」という疑問も起きて来る。

この説に対する DA の考えは高姿勢と呼んで然るべきものである。つまり弱腰の Wartburg を追抜いて、さらに先へ進み、奇想天外ともいえるような結論を引出している。彼は相ことなった作用により、相ことなった時期に、相ことなった方法で、相ことなった民族にたいし、したがってまた相ことなった言語変化の時期に行われた同種の変化を、フランス北部、ブルグンド族の領域、北イタリアという相ことなった場所に認めることに困惑の念を禁じえず、たしかに以上三つの場合に同じ結果を求めるのは無理だとしている。しかし開音節における母音の変化と閉音節における母音の変化とがちがうこと、つまり開音節に限られた母音の二重母音化がこれら三つの地方に特有の共通特徴だとした場合、そういった共通特徴は他にもっとないものだろうかと彼は問うてみる。答は然りである。すなわち① $K^a > \hat{t}^i$, ② $-t-, -k- > \emptyset$ が上記3地方に共通の現象である。以下に述べる考えに Wartburg は賛同しないけれども、DA はこれら合計三つもの共通特徴がある以上、三つの相ことなる歴史上の事件によって生まれたこのふしぎな同一結果はそれら三つの事件が起きた三地方がまだ不可分であったずっと古い時代に起こった何らかの原因に根差していると考えた方が手取り早いという。ただし、それでもスペインとルーマニアの二重母音化は説明されないまま残る。

〔B〕 Schürr の説(注4)

彼は二重母音化に二種類あると主張する。一つは \acute{e} ($\langle \underset{e}{\acute{e}} \rangle$) と \acute{o} ($\langle \underset{o}{\acute{o}} \rangle$) の二重母音化で、もう一つは \acute{e} ($\langle \underset{e}{\acute{e}}, \underset{i}{\acute{e}} \rangle$) と \acute{o} ($\langle \underset{o}{\acute{o}}, \underset{u}{\acute{o}} \rangle$) のそれである。このうちスペイン、フランス、イタリア、ダルマチア、ルーマニア等の諸言語に見られる前者の方は大変古い時代の現象で、フランス語にのみ見られる後者はずっと最近の現象だという。ここでいう大変古い時代とは文書がまだなかったような時代のことである。その後多くの地域においてこの古えの状況を変容させるような一連の現象が起こったのであろう。その現象とはある場合には一連の単母音化であり、それによって以前の二重母音が姿を消したのがポルトガル語である。また他の場合には一連の一般化によって、*metafonía* (注5) により生じた二重母音が、元来 *metafonía* を蒙らないはずの \acute{e} , \acute{o} にまで拡がり(中部および南部イタリアにおけるように)、フランス語におけるように開音節であれば二重母音化が必ず起こるように規則化されたり、またスペイン語、ルーマニア語におけるように閉音節においてもそれが規則化されるようになったのである。

DA によればこの説明は否定しようにもまたそれに賛同しようにもまったく根拠がない。それなのに Schürr は大胆にもこの説をルーマニア各地につき逐一証明しようとする。まずイタリア語にそれを適用せんとしたが、Aebischer の反論に会い挫折した。とにかく Schürr の説は仮説の積重ねで、しかもその仮説がすべて人を納得させるものでないから困り

(注4) 彼の *La Diphtongaison Romane*, *REVUE DE LINGUISTIQUE ROMANE* 20. 107-248(1956)より要約。

物である。さらに悪いことには、ある仮説を提出するとその数行下では早くもそれが“真実”に変わり、その上に新しい理論が積重ねられるという状態である。前章で筆者が述べたドイツ学者の一般的性格はLüdkeよりもむしろこのSchürrにピッタリとあてはまりそうである。

次にSchürrの仮説はポルトガル語およびガリシア方言に適用される。そのさい彼が強調するのはポルトガル語強勢母音(éとó)の-i, -uにたいする強い感受性である。その意味で彼の用いる“galicien-portugais”という表現は不適當である。その理由は①ガリシア方言のe, oにはポルトガル語のe, oほどに開閉の差が著しくない, ②ガリシア方言では-oはポルトガル語やアストゥーリアス方言のように〔u〕とは発音されず〔o〕のままであるからである。つまりSchürrには全ロマニア方言にたいする正確な知識が欠けているのである。それはともかく、Schürrによればポルトガル語には真の意味でのmetafoníaによる二重母音化があったそうで、たとえばeとoは、むかし存在した**ié, *uó*の単母音化により生じたものということになる。そのさいの彼の拠り所は北部Oporto近辺の方言に見られる俗ラテン語のe, o; e, oの二重母音化現象である。しかしDAによるとこの二重母音化は最近生じつつある現象であり、その証拠に半子音のj, wが非常に微弱に発音される。しかもこの二重母音化(wó)は先行子音の性質(唇音又は軟口蓋音等)により条件づけられている。さらにこれらの地方には*jé, wó*の他に*jé, wó*もあることを忘れてはならない。これはまさにSchürrの公式*é > jé > jé > é* および *ó > wó > wó > ó* に反する。かくてポルトガル語へのSchürr説の適用も不成功に終わったことになる。

最後にスペイン語へのSchürr説の適用はどうか。ここでは彼の仮説は二つの群に分けられている。まず仮説第一群。metafoníaによって成立した“北西部”の二重母音すなわち**-iellu, -ellos, -ella, -ellas; *muortu, mortos, morta, mortas*は他の地方の古来の*é, ó*と触れ合い、その結果、yodの前でもすでに二重母音を有していた(*viel'o, uol'o, fuol'a, nuoitte...*) 中央部の人々は北西部のmetafoníaによる二重母音(**-iellu, *muortu*)を模倣し、さらに複数形や女性形にもこれを広めたのだろう。**-iella, *-iellos, *-iellas; *muorta,*

- (注5) *é*と*ó*に対し条件変異を起こさせうる音にはどんなものがあるかを調べてみると、
- ① *herī > cat. ahir*の末尾の-iのように強勢母音と完全に隔絶しているもの。
 - ② *yod*: この場合 *fólia > cat. fulla*のように子音によって強勢母音から引離されているが、その子音を口蓋化する事によって融合してしまうものと *vin-demia > esp. vendimia*のようにそのまま残るものとある。
 - ③ 半母音 *i* が生じて強勢母音と接触: この場合 *nocte > fr. nuit* のようにそのまま残るものと *pectus > esp. pechos* のように後続子音の口蓋化を起こすものがある。

これら三種の共通点はとくに閉じた音(-i, -u, yod, 半母音 *i*) が先行の母音に影響を与えることにあり、この現象を一般に *inflexión* と呼ぶことにし、そのうち語末子音 -i, -u によって生ずる *inflexión* をとくに *metafonía* と呼ぶことにする。両術語とも適当な和訳が不可能だし、また下手に和訳して誤解を招いても困るので、そのままスペイン語の形のまま用いることにする。

*muertos, *muortas。その後 -u と -o との係争の結果 -o が勝ち、そのためにかえて二重母音があらゆる環境に広まることになった。

仮説第二群。lecho, hoy, ojo, poyo 等, yod の影響により二重母音化しなかった事例をどう説明するか。これはカスティーヤがまだ伯爵領で小さく片隅に引込んでいて、もちろん当時の文書など残っていない時代に、スペイン語でも二重母音化が起こったが、それがのちに e, o に単母音化したものと説明される。こうした状態のとき、歴史上北部勢力の南下が始まり、北方の e, o, それに二重母音化せぬままの ε, o が南下し、二重母音が一般化していた南部の言語とぶつかり、ε, o が jé, wó にとって代られた。また e, o はそのままであった。

以上が Schürr の仮説第二群である。DA ははいねいに反論しているが、筆者はこの仮説があまりに荒唐無稽なので反論または DA の反論紹介の必要を認めない。要するに彼の説はスペイン語史上の確固たる事実に基いていないということである。

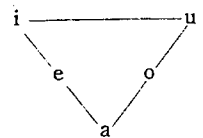
最後に DA がこのロマニアの二重母音化現象について意見を述べている。一言にしていうならば、この問題は未解決ということになる。しかし考えられうる原因というのはいくつもある。目下のところは考えられうる原因をできるだけ多く列挙しておいて、単一の原因でこの現象を説明しようとしないう方が賢明であろうというのが DA の態度である。なお、スペイン、ルーマニアを除くロマニアの二重母音化現象を DA はゲルマン系民族の上層という単一の原因で説明したが、これについては「一本の綱はその最も弱い部分一カ所から切れるが、切れた原因には色々ある」というたとえを引用して、前説と本結論との間に矛盾はないとしている。しかし我々にはやはり矛盾があるように思え、首をかしげざるをえない。

とにかく DA にとって考えられうる原因を列挙してみよう。① -i と -u による metafonía, ② yod の前での二重母音化, ③ ある種の先行子音によって起こされる二重母音化, ④ 閉音節であるがために起こる二重母音化, ⑤ 閉じた e と o しか持たない言語の素地, ⑥ 前述のゲルマン系民族の言語の上層, ⑦ 母音の強調又は引伸ばしにより起こる自発的な二重母音化。

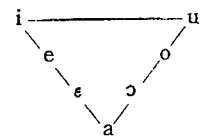
このうち⑤は Omagiu lui Iorgu Iordan, Academia Republicii Populare Romîne, 1958 中の Quelques Précisions sur la Diphtongaison Espagnole において Alarcos が主張しているものであり、また⑦は Orígenes del Español, Madrid, 1956 の p. 125 において Menéndez Pidal が主張しているものである。

筆者はこのように多種の原因を想定しておく DA の態度に賛成するが、それだっただけならもう一つ、上の表に⑧をつけ加えたいと思う。(注6) ある人は⑧は⑤と似ている、又は同じであるというかも知れない。しかし筆者は純粹に構造主義的な立場からこれを述べようというのである。つまりもし言語の最も理想的な母音体系が i, e, a, o, u という五つの母音のみによって構成される右の第2表のような逆三角形であるという仮説が正し

いとすれば、スペイン語には俗ラテン語から受け継いだ第3表のような体系をいつまでも保持しようという意志は毛頭なかったとか、またはそのような体系を嫌い、第2表のような理想的な体系へ一日も早く近づこうという傾向が潜在していたとかいえることができるのではな



〔第2表〕



〔第3表〕

かろうか。そのさい余分な ϵ と ω とを解決するのに残りの五母音どうしの組合わせ、つまり二重母音を用いることに思い至ったのではなかろうか。しかし構造主義的な考え方の大嫌いな DA にはこの説は容易に採択し難いものであろう。

Ⅲ 第3章は「スペイン語圏における音節末の -s について」と題されている。ロマニア全体という次元でこの現象を見ると、大変興味深いことに気がつく。つまり東ロマニアでは比較的早期に -s が消失したのにたいし、西ロマニアでは比較的遅くまで -s が保存されていたという事実がそれである。ただし、いま「早期に」とか「遅く」という用語を用いたが、そうはいつでも話は俗ラテン語の時代のことである。-s の保存・消失の問題はごく最近の現象であるとする Rohlf s に DA は反対している。また Wartburg は西ロマニアで比較的遅くまで -s が保存されたことの理由として同地方における学校教育の普及をあげているが、これにも DA は反証をあげて反対している。いずれにせよその後、西ロマニアでもフランス語、プロヴァンス語、スペイン語などに -s の気音化ないしは消失の傾向が現われ始めた。フランス語に至ってはすでに中世において消失の傾向が認められている。

簡約すると以上のことを DA はこの章で述べているだけである。イタリア語、ルーマニア語によって代表される東ロマニアの言語とフランス語、スペイン語、ポルトガル語によって代表される西ロマニアの言語とではその変化の仕方に著しい差違が認められるということとはわかるにしても、何か不満の残る章である。

筆者の考えによれば、もともと -s は消失する可能性もあれば、残存する可能性もある音だということになる。東ロマニアで -s が早期に消えたとすれば、やはりそれは名詞の複数語尾が母音の交替のみによって表わされるといった形態論的な原因を考えねばならないであろう。ところが西ロマニアでは -s は東ロマニア以上に保存された。スペイン語の場合を考えても、当然名詞の複数語尾として、また動詞の 2 人称単数語尾（直説法過去を除く他の全時制）として重要な役割を果していることをその原因に数えないわけにはいかない。しかし原因はそれだけではない。現代のスペイン語の音節構造をも考慮すべきである。そもそも音節末に置かれうる子音にはどんなものがあるか。音素論的にいうならば、半母音、/r/, /l/, /n/ などの流音、鼻音を除けばあとはすべて摩擦音であり、破裂音は絶対に現われない。その摩擦音の代表は /s/ であり /θ/ である。まれに /f/ や /x/ も現われなくはない。純音声学的にいてもロシア語に現われる [s] 音などは相当に音節核音的性質を強く持っているし、また Spaulding もその著 How Spanish Grew, Berkeley & Los Angeles, 1962 の p. 37 でこのことに触れ、次のように述べている。

「ときには単語の形は 1 呼気段落の中でそれが占める位置によって定まることがある。こ

(注6) この⑧は筆者が勝手に考えついたものであるが、こういう考え方は目下流行の生成音韻論にもあるらしい。今井邦彦氏は「生成音韻論の新方向」と題して「英語青年」113. 378-379 (1967) に Chomsky や Halle による生成音韻論の最近の動向を紹介しておられるが、その p. 378 a に次のような文章がある。

「さらに、母音組織についても、かりに三母音からなるものであれば、その optimal な型は、 $\begin{matrix} i & - & u \\ & \diagdown & / \\ & a & \end{matrix}$ であると考え、 $\begin{matrix} \ddot{u} \\ & \diagdown & / \\ \text{æ} & - & a \end{matrix}$ とか $\text{æ} - a - \omega$ などに出会ったならば、それを deviant な型と見るのが、正しい直観といえよう。」

のケースは古典ラテン語にはなかったが、俗ラテン語における語尾変化の消失または減縮が進むにつれて、語がその文中の位置によってその形を変える傾向が現われた。かくしてたとえばある語が s + 子音 (ふつうは sc-, sp-, st-) で始まり、先行する語が子音で終わるとすると、前方母音 (最初は i と表記された) を接頭させる習慣がついた。これは恐らく s が事実上、i 音節の価値を持っていたからであろう (圏点—原)。例: cum scuto > cum iscutio > con escudo, これが類推されて ille scutum > el escudo。のちには e と表記されるに至ったこのような母音は San Isidoro によって最初に表記され (Grandgent の Vulgar Latin, §230 (注7) によれば)、スペイン語の特色となるに至った。つまりスペイン語にとってはこの“不純な” s はどうていなじめない音であり、直ちに変形が加えられることになったのである。例: Stephanum > Esteban, Squilacci > Esquilache, specimen > espécimen, spleen > esplín, smoking (= tuxedo) > esmoquin。この結果、次のような無邪気なしゃれが生まれたりした。Me he entregado por completo a este sport. ¿Es por ... higiene acaso? No; es por capricho (Vital Aza, La praviana, X)]

以上は音節始めの s- についての陳述ではあるが、いずれの位置に立とうと s がやや音節核音的な性質を本来有している — 少なくともロマンス系言語において — ことはたしかである。しかも Alvaro Galmés de Fuentes の著書 Las Sibilantes en la Romania, Madrid, 1962 において証明されたところによると、俗ラテン語の s は舌尖歯茎音であったそうである。音声学的にいてこの s が舌背歯茎の s よりは消失しにくいということはいえると思う。現にスペイン語の -s についてこれは実証可能である。ただし俗ラテン語の語末子音はすべて消失しうる可能性もあるという前提もまた忘れてはならない。-s の消失・保存については以上のような要因を考えるべきであると思う。

IV. 第4章は「ラテン語で終りから3番目の音節に強勢のある語についてのイベリア半島における解決法について」と題されている。ここでもやはり西ロマニアと東ロマニアとの差違は著しいものがある。すなわち東ロマニアでは終りから3番目の音節に強勢のある語の終りから2番目の音節の母音は消失しないが、西ロマニアではそれが消失する。しかも同じ西ロマニアでも言語による差違が著しく、たとえばフランス語では当該母音がすべて例外なく落ちるのにたいして、スペイン語は a だけが例外的に残り、またフランス語では母音間破裂子音の有声化が起こる以前にこの現象つまり強勢音節直後の音節の母音消失が起こったのにたいし、スペイン語では順序が逆である。またポルトガル語では、現在文書の残っていない中世においてはこのように終りから3番目の音節に強勢のある語を縮めることによって終りから2番目に強勢が置かれた、より自然な語にする作業の進行スピードがきわめて遅かった

(注7) 該当箇所を引用しておく。

「子音の前の s は現代イタリア語のように明らかに長く強かった。したがって語頭では音節核音の効果を有していた: s-chola。このことから s- の前に子音で終る語が置かれた時、その間に母音 (Ⅶ世紀までは常に i, それ以後はたいいていの場合 e) が置かれることになったのである。in i-schola。この i または e がのちに当該単語の構成部分と考えられるに至った。」(スペイン語訳の p. 154)

が、のちに急激にその速度を増し、例外なく強勢音節直後の音節の母音を落とすに至った。

このようにして最後から3番目の音節に強勢を有する語を最後から2番目の音節に強勢が来る語に直す方法の他に、同じ結果を導くもう一つの方法がある。それは語末母音を落とす方法である。この現象の見られる極西部が他ならぬスペイン語の話されている地帯であり、それより東にアラゴン方言、カタラン語、ガスコーニュ語、プロヴァンス語、フランコ・プロヴァンス語、レト・ロマン語、イタリア北部の諸言語が同じ特徴を持って拡がっている。中には教養語使用への傾向によって説明される例もないではないが、それが全部とはいえない。また珍稀な子音群の発生を避ける意味もあっただろう。いずれにしてもこの現象を説明するのにスペイン語だけに注目せず、上記のような広大なブロック全体に共通の原因で説明を行うべきである。そうなると上記2原因の他に、強中弱という下降型のアクセントと強弱中という中凹みのアクセントとの係争という原因も考えてよいのではないかとDAは結んでいる。

この章にかんしては筆者は特に意見を持たない。

V. 語末母音

ロマンス系の言語を語末母音の脱落の程度によって配列すると、次のようになる。すべて保存するものを最初に、すべて消失するものを最後に置く。①イタリア語、②スペイン語、ポルトガル語、③モサラベ方言、アラゴン方言、④プロヴァンス語、カタラン語、⑤フランス語。

スペイン語はイタリア語やルーマニア語がそのまま保存している*-i*を*-e*と混同したため、複数の形態音素として*-s*を用いざるをえなくなったと解される。また*θ*, *l*, *n*, *r*, *s*, *y*のあとでは前方母音を消失させるという特徴もある。ただしそれら子音の前に半母音や他の子音が来る場合や動詞の活用形の場合を除く。要するに上の順位表からイベリア半島の諸言語についていえることは、中世において半島東部には*-e*と*-o*を消失させる強い傾向があり、西部には反対に両音を保持せんとする傾向があったということである。XI世紀の終りからXIII世紀半ばにかけては北東部つまりフランスからの言語の影響が強く、イベリア半島でも前者の傾向が支配的であった。ところがXIII世紀になると反対の傾向が勢いを得、XIV、XV世紀には完全に形勢逆転し、*-e*と*-o*は復活して今日に至るのである。

この章で述べられていることはLibro de Buen Amor等の古典を読む時にはぜひとも覚えておかねばならないことであり、また第3章とも関連してスペイン語の音節構造の特色を知る上に必要不可欠の事項でもあり、大いに興味深い。

VI. *-KT-*の変化の結果

西ロマニア全土においてラテン語の*-KT-*は*-i t-* (または*-tʃ-*)となったが、これはケルト語の素地によるものという説がある。しかしこれには賛否両論があり、どちらかに軍配をあげることは至難の業である。

まず素地説に賛成の学者の名前をあげるならば、DA, Wartburg, Schuchart, Ascoli, Thurneysen, Windisch, Bourciez, Meyer-Lübke, Grandgent, García de Diego, Dauzat, Pope, Kuhn, Terracini, Whatmough, Gray, Lapesa等である。

反対の学者としてはRohlf, Lausberg, Vendryes, Entwistle, Cou-

ceiro Freijomil等がいる。

まずDAがその著書の中で述べていることを概括すると次のようになる。-KT-の変化にかんしてフランスとイベリア半島を概観した場合、二つの変化結果 -it- と iʃ- とが带状に交代しているといえる。まず -it- の帯はピレネー山脈の南北を走っている。そのうちの一つはフランスの最南部を東西に走り、これと接触するようにもう一つが西仏国境の南を高地アラゴン方言からカタラン語へ、そして地中海岸を南下して広がっている。次に西方には(また西方では北から南へも)スペイン語の -iʃ- の領域が広がり、さらに西方にはガリシヤ・ポルトガル語(と西レオン方言)の -it- の地域がある。フランスに戻って先程の -it- の帯の北、プロヴァンス語の地域には -iʃ- の一帯があり、さらに北にはふたたび -it- が現われ、北部フランス語につながっている。

結局、DAはケルト語の素地を最も受け容れ易い説としているだけで、その根拠は何もないといってよい。ただ -it- と -iʃ- の分布状態を説明しているだけである。筆者がかつてに推測させてもらおうとすれば、むかしケルト族が住んでいた一帯と -KT- > -it- (> iʃ-) の一帯とが一致するから、ケルト語の素地を認めてよいということらしい。(しかし素地説のわかるがしい適用にたいしてはとくに慎重な態度をとるわれわれ^(注8)を納得させるに十分な説明とはいえない。ここでさらに慎重を期するために、他の学者の説にもいちおう耳を傾けることにしよう。まず素地賛成派のWartburgはその著 *La Fragmentación Lingüística de la Romania*, Madrid, 1952の2. *La Acción del Galo*, a) El grupo -CT- (pp. 50-51)において、昔のケルト族の分布地域と -it- のそれとが一致していることを主張し、さらに -KT- は -xt- を経て -it- になったが、この第一の変化段階はガリアの貨幣や碑銘によって確認されていると述べている。一方Lausbergはその著 *Lingüística Románica* のI. Fonéticaの§. 430以下において、-KT- > -çt- > -it- に純音声学的説明を与えており、とくに素地説に異を唱えているようには思えず、ましてや賛成はしていない。ここで興味深いのはLausbergが -iʃ- を -it- の変化結果として導くというMenéndez Pidal流の解釈をとらず、-KT- > -çt- > -iʃ- > -iʃ- というまったく別の変化過程を想定していることである。

さてこういった諸説紛々のまっただ中に迷い込んでしまった筆者は何か結論らしきものを出すどころではなくなりました。仕方なく現在の筆者の考えに最も近いと思われるJungemannの説を最後に引用してこの章を閉じることとする。彼はその著 *La Teoría del Sustrato y los Dialectos Hispano-Romances y Gascones* の第Ⅸ章において以下のような結論を出している。

「-KT- > -it- の変化はラテン語の語中子音群の縮少という西ロマニアのロマンス語全体に見られる総体的傾向の一局面として説明しようと思えばそれで説明可能である。

この傾向はラテン語の母音間破裂音の弱化、二重子音の単子音化といった西ロマニアのロマンス語子音体系の変化と平行しており、また恐らくそれと関係があるだろう。またこの子音体系全体の変化はケルト語に起こったようなゆるみ音化の過程の結末であるように思われる。

〔以下43ページに続く〕

(注8) 拙稿「中南米のスペイン語(その四) — “中南米のスペイン語(その一) substratumについて” に対する補足 —」 *HISPANICA* 10. 27-36(1965)参照。

とができたのです。brug:cug(<cogito), brui:cui(pron.), brutz:lutz(<iuicem)

いうまでもなく、この書の性質上理論の面で独創を期待すべきものではありませんが、第1章の理論篇が全体の3分の1の量を占め、註では普通入門書にみられる以上に多くの専門的な参考書が挙げられていることをみても明らかなように、入門者にたいして最初からしっかりした理論的な基礎を与えておこうという意図がみられます。

続く第2, 第3の章では史的音韻論・形態論がほぼ等分(各35p, 41p)に論じられています。このページ数で古代プロヴァンス語のすべてを論じつくすことが不可能なことは当然ですが、著者は例えば音韻論では各音韻を個別に取扱うことをせず、音韻のaccentの有無、位置などによってそのたどった変化を論じ、けっきょくは要を尽しており、簡略ながら綴字の問題にもふれております。形態論の章では、例えば動詞の変化はその活用を語根の型によって分類し、その変化を説き、動詞変化の基本をすべて言い尽しているのは、maestroの手並の程を感じさせます。

要するにこの小冊子は、これ1冊をもって直ちにあの無類に難解精緻なトルバドゥールの詩の世界に入ってゆくことができる、と云うようなものではありません。そのためには初心者に必要な細部が欠けております。とくに個々の重要な不規則変化動詞の活用表などが是非とも必要であったと思われます。しかし入門書としては、確かな理論的な基礎にたいする配慮、全体としてバランスのとれた記述など、類書にも見られない長所のあることも見逃すことはできません。(Aurelio Roncaglia, La lingua dei trovatori, profilo di grammatica storica del provenzale antico, Edizioni dell'Ateneo, Roma 1965)

(明治大学助教授 神沢栄三)

[32ページより続く]

他方、-KT->-it- はケルト語の素地が直接影響した結果とも説明できる。つまりラテン語の-KT-がケルト語とラテン語の両語を話す人々によってケルト語子音群-xt-<*-kt-と同一視されたのである。

この素地説を支持するのはこの現象がケルト語圏に特有のものであるという事実である。しかしケルト語圏に属さない広大な地域にもこの現象が見られること、また劣勢言語の諸特徴がラテン語の中に導入され残存するに適当な社会・言語学的条件を広大なケルト語圏全体にわたって想定せねばならないこと等の難点もある。」

どうやらこの変化、純音声学的にまた多少ストラクチャラルに説明しておいた方が無難のようである。

(東京外国語大学 助教授)